紫式部日記註釋

四

915.35-Sh49ウ
1200500758507
.35
49

始

紫式部日記註釋

四止

915.35
SH49

33.12.25

915.35
SH 49

紫式部日記釈巻四

ものしたるこそ、ものしたるこそ、はけ
しうもあらぬ人、ものしたるこそ、
いとうたてあれ、ものしたるこそ、
いとうたてあれ、ものしたるこそ、
ものしたるこそ、ものしたるこそ、
ものしたるこそ、ものしたるこそ、
ものしたるこそ

うたえんとをうるさとゐれほえ。うたのことろう。ゐることの言ゐみさゐにて
丁抜を作るさぬ。ゐちにまゐをなることとに。うゑるほをうしてふしの乃
めふとゐるゐみ抜人作り

師ゑくうたえいとをうしきとは。いつこゐ方はいとをうしきとらと。まつほあたる
なり。さのれほえきとは。古言をらくれほゑあて言とゐとゐうを。
らくはきゑめしふまとの言ちみなり。さすにてきなけれ。ふらくとれへるなり。
くそしゑれそ。らたふる言をえれほくあて。けふ言いうくさゐふらむへきとの
なり。といふ理をゆきゑめきるらしを。俗のえみしうれへるなり。といれさ。
きのれほえうたの。数や年。きのれほえたのとは
きれたふ。人のゐみなるん言。なむじことろうぬたるんは世やさ法て

おろはえしいにふと言れらゐるなめりとそ。見えたるすちふ作
らし。そつうけの言ゐみやとは。れほえ作るは
きれたふ言。すこしその作をやとんふゐひて見るへし。なむしい新しなり
れしきい。れの言葉言ふれそぬとあて。うちなけきて。そのよをいれる
をその発作なり。といれさ。ゐてはウレホドミなり。おろええのおろい言れ
う人ふえたることの云なり。れふ言。れふゐをたるきとれへるとこれなく。今世の
人ふ。見ふゐのうたふうとく。れほえのうたのたとくしく言のとろうのれほ
つうなたなとゐ。ゐみれてたる言のさゐの。たるるふ新なくきてたるなとを。す
れさちれふ言のゐゐるる人なりけるしふゐ。へとうへし。れ泉いうるる
のすちれ言ゐみなへし。そつうけれ言ゐのれふきつうけふれもそれにあな

たのさはめしずくしたるをいとこのわ泉はをうしてこゝしいあれとこゝろのくふ
そつうくはなさるいろうのこのらみふはゆうにとゝり
高階業遠朝臣
きんそのうこと記小のうたをは文度なるものとなりにそ。まさひら〜歩つとを。
ゐしゐる
小のうた侍従小江侍従とは文そ中良。度ハ道長公の乳方をいふ。まさひら〜歩つ
とは作者部類に大江匡衡女。母赤染衛門とゝきて。コヲ父母の名をとり
しこのことなり也しそ云ふいふなるつきかは江侍従とゝ云は姓をつけていふ也。清
か納言のたゝひと同ことゝり
ことゝにやむことなき人とゝ孫とまたとに申ゐくしく。このらみと
てらろつれことふつけてらみちろさまと。ゆえなるこゝりはそろなるをを
ふしれことゝとゝをかりおそのつ　ゐらちつきかゆれ
やむことなきはいとゝくすくなるにて。おのゝ〜のとゝり。身のほとのとふえあ
らに。ゆらみとはらに。ゆらみとてのえなる。えれをえおのをつしけのえ
小紫へてこの江侍従はすくれたるらなる。　まとふ数やにらる
やうとせは。こしそなれぬそうゝ。なるかうゝなる。ゆをらみて。元もいそぬ
らしえみことしてとゝをかりこにたもひなる人ふくをいとゆくをとれ
ほえゆるとはなる
やうとせそ。ふ脳えて。ゆくををきはふなるふをくとをすれそとゝふ用く。
ナンゾトイフトトいふゝ名ゆり。こしそなれぬそうゝ。おふこーをれたることやうゝ
まをなりけんとゝをつ。ゆふこーをれ。ゆとい山もか未てらたゝ。ゆのうゝ人をれの

うゐ・ゆあるものの・ものをいふ・ものさる法・三のるを・腰勺と・ゑへ・ルそなり・ものゑ病ホ・
蛭腰病と・ゑへ・るゆ・ふ・ルちり・そなり・ルぬのぬい・草ぬのぬ・なり・ゑもれそぬは・イフニモ
イエスなり・ら・ルそとは・ら・めさうるふ・いとほ・くそそは・体の人のうえて・
にそあさ・ゆるをもうて・ゆ・れ・ら・こにたもひなる法のいとほ・ら・たもはそ
なり

清少納言ゑ・ゆ・たり・ゑたり・うほ・ふ・れ・そう・ゆ・ら・ける人さは・うそ・きうしたち・
ものなうゑ・ちしして・ゆ・る法とも・ら・く・ゑれは・ものとゑ人ぬこ・ゑたほ・う
清少納言ハ・清原元輔の女・そ・う・ゑ・れ・草・う・ゑ・ル人なり・れそ　うハ・した
りうほなるうたの・れそ・きをら・ふ・人の下の・文ものなとゑたちしにや・と・ゆ・体・義い
ゑれなり・さうしたちたる法ゑ・枕草ゆをゑれ・いけ・ら・く・そうそなり・ものは・

ゆ・ま・に・紫へて・男文ものをいふ・ゑ・ぬこ・とは・そのそぬ・法をれ・へり

うく・人ふことなるんとゑ・ゑれこのめる人は・う・ら・ほ・ゑ・ゑ・たとうし・りす
ゑ・うたて・ゆそ・ゆれは・えんふなるぬる人それとすうう・すろなるをうを・
も・ゆあゑれふすこ・をうゑことそ・ゑすくさぬほふ・ゑのつうふ・る法
く・ゆたなる法ふをなるに・ゆ・へし・そのあたふなるぬる人のそて・れうそう
は・ら・く・ゆ・るん

人ふそ・せ・ゑのすへての人になる・うたては・松の義ふ・うそはらうれとゑふ
ものすこそ・いら・くあ・くなるそろふれう・ゑ・ゑて・れ・ゑれにも・ゑれうなへう・
とそそなる・そ・ゑ・ゑ・ゑたうし・り・ゑうたて・のそ・ゆれ・いさ・ものとれ・の
てそは・ものと・ゆをゑれて・ゑうへし・えんふは・えんなるうたふなる・ゆ・ふ義ゑ・

えんなる人と、人まといまでやになりしへなり、いまはうすうすえんなる
うたなかめりしなりたなとはいてくりたりてすくらにきけくなるうたを
いふすろはせくろと同くそ、おふれへり、こそ、えんふかなかめりきうたそなくす
くらにさはなる伸さをくもとりうえなり、徐ふるうこれそえんなるこの、
いとれつかしうあをうなり、常ホきのふるうきあやめの長、宇陽の宴ジ
とふに同といえふそ、をのあそれふきいをのえんなるうたふなりぬる人そ、
いとすこすこすろなるをうもを沈あそれのうたふすこそ、をりたをそ
くさにそうたふそつふほふたのつこあたなるうかふもなるに作へしと
なり、あたといれりうなりてこれさうなるうつりたきをいふさやになりし
人の身のそ、らくはあしとれへうなり、そ、ふとなんと思ひこのめる人と、

また えんふなりぬる人の こさいつれもらたほふありて、身のりホまで、らりう
ぬらにれへり、徐ホ春い、こさにそありしたりこりきなるへしといれる
りまて、たりうなりぬをなれとこの清かれ、納そのちかい法にまへ人たりとふこ
とる、そのふそたり、まことなりはそれにぬるにらくこれへり
このくうたくふほけて、ふしのれもいぬそ、とるへきことれくそすくし作ぬ
る人ぬことふりすそのたのそをなりて徐なくさめたをしこうたふ作り称
と、れすこうりもてなに身徐とたふ思ひ作りし
うたくいあのあまこの世房とものゆうまこうたちらう、らうれんもちひのまをう
をへたりぬるのうたくなり、そ、そうたくふつけて、ふしのそ作りぬる人と
いこつりりのとふて、卑ひしてれへるなり、れすこうこいえんなるうたそきはや

にとられて、ひさしうにずくらに、引ぬいて、さてなたへさ身をとたゝきて、点り、ゆらい中文を仕の写なれい、おしい、えんなるうたをぐーてゝの、その歌をにら、紅ほふあゝ酒浮をさそにれへるを、こつゝとよろこふと、まゝにてゆゝんと思ふんなう

おのんなほうせあ中や、そのおもひ酒さる秋の歌を、そにれてかて、なゝめは、いと、月やれにしへをもてけんと考えたるあゝさ酒をさ屋にやゝに作るへし

おのんハんすゝうを作ゝしと思ひて、おしい、えんなるうたをぐーてちんと思ふんなう、なほさうのつきに、佛のそふふうく思ひうたれよ、れ、れよ、れ、はらの中のうたにうつゝひて、秋のらなとそ、その思ひ酒さるなゝ、古今ふれつは

とはいそうとと秋のらそ、拙れすゝとのこうなりけゝ、あるこし人を、就中断腸是秋天なとよいひて、秋そ、雅を拙なひのまさる的為なゝ、さそその拙なひのまゝ、しふそ、のうたふ本居てなゝむれそなゝれとそこれハ、今に、侍ふれ、ぬ年、老て、月をなゝむれハ、言ようくさうなゝしほとに、えしあゝさすを、月のんにやめてうゝん、と思ふんをのあるをとゝ、ふそ、れへるなゝんしを侍ふ、おとい、考へされとも、ゝ、ゝにさそなゝんとそ思ふそ、考居ゝ、ゝさ酒とい、を侍ふのうへに、そ居あゝさ酒にて、我身のさたすきれとそ、人たゝを思ひて、れへ居ゝ、ゝらほほそ、ゝ居ふ、うれをゝるを、れ、

世の人れ、れむといひ作ゝとゝ、ゝを、ゝ、ゝにそなゝり作ゝ、なんとそうれて、すこし、れくふひさ、ゝりてそ、さ居ふんのうちにそ、ほきせほれ、れて

けられ侍

世の人ゑれむといひ侍るに、竹取物語にうくひす、姫月のれそ、ちうそたるをみて、
孫らも、あはれひなさになり、ある人の、月のうをみるにゑむとて、ゑれしけれとも
さすれは、ひとまにて、月をみて、いとくなに侍り、後撰集に、月をあそれとん
ふはれむなり、といふ人のありけれは、ちゝ人、(但小世集にみえたり)ひとり孫のゑれし
きはふなきにて、月をあそれとそうゑるなとゝて、常はいとしかりそ
しのゆりしなり、とゝかとは、そなりてをいたして、みるをとゝかとは、また
り侍りなんとき、人のゑれむとて、ゑれになるとのゑふをたゝんと、思ひをこう
れて、そのうたりかし、要さ国へ引いりてゆるなり、ゑれとうくては、ちうでは
とゝきとゝまり、もとのまなゝにをなりとゝ、侍りなとゆるへきにあらさに

ふきに、月をゝ海ふしの侍るをうのしてさなるを、要さ国へ引りていさなり
にをみるをれとも、ミカシナガラ人のゝちかい、物ふそゝさのつきせにきとなり、
さて、ことを、世の人のゑれむなるものとゝなゝくにをうて、要さ国へ引いり
て侍るを、人ふとゝゝんと思ひこの国にて、ちゝにをなりて、ちゝにをとゝをなる国なり、
風をみるをゑれむことふするは、白氏文集、贈内詩に、莫對月明思往事、損君顔色減君年、と、
ゝへるなとちうやさるなゝいとはなりつゝんさゝは、女
ゝ人のゝのとゝなり、　とゝ、とうとゝに

風のすゝしゝ秋ちかくなりてらうゝぬひとうことをうゝなゝしてゝなけき
くゝるとゝをゝしる人やあゝんと申ゝしゝくなとれにゝ侍るとゝ侍るをこ
にをあそれにを侍りけき

きて　さうぬいつたなら一に早ていとへとなりかけきくそるふ変今集にな
へさうけるゆふあれたる家ふ女の琴ひきけるをきて　ながめていれたりしるら
しこゑのむまさたるひ人のすむてきやとゝ又るなへふなけきくそるる琴の称
そいるとそたるにて我さくくるひきなれふうたなゝに琴の称ふだ
けきの声のくるほとを又さやにてしるあんん高ゆしくそこ
こをイてくシキうたて　ふひしたさはをきくしふんゝイてくシキなりされ
とをとうふひしきなれはおうきてしふんをイてくシクはしきをて　枕
さふはをこふもはさなをうつそしあそれにも作けきとなりおこはアハウ
ナにて早ていとへるなり人の許いうたをそ見する内なるにうて　うく事に早
ていとへる

さるはあやしう　くろそすけたるはうしにさうのことそこそんおうへな
うゝんふいまて　あふる日ことをたふをなとをいひ作ぬ海ふちり
はをうて　らをたをたるゝ　ほしとそ（厨子）らのそさ海ふ　そびさゝ以ふ
ひをとしたりこをふたを作（琵琶）
さるそ　あのきゝしる人やあんとゆしくきをうけてさやうなんもこと
うゝツレいうくあやうくろそすけたるはうしにきといふをなりさるは
こをとのるいふくをあをそうけて　そうを新て以る作ふてこをあやう
くろそすけたるはうしと以ふやそ新たる海ふて省きて書なり　はう
しい曹司にて我里亭の局のさ海なり　さうのことふ今の十三絃の琴なり
そぐんい和名抄に日本琴云々有二六弦一俗用倭琴二字　夜萬止古止と人と

源氏物語ハ、あづまとよみたり。さくらゝ、なるゝ、柱をたて、さくらゝとのゝたる
所ゝにてあるさまなり。ムかい北にて、をしすゝ、下のなとよいひ作ゝぬまていく
く文なり。と能本ハ、ゆいをれを、弾物の作者、ふいきにして、なをさうにしなれ
り。昨夜、あるる日、ともちなとさにしてわけそ、ばうな徐ゆひて、ものゝくなな
まさるゝにひさのふんいゝ人そ、あるる日にともちなそれくとゝ、といそれ
たり。らをなてなゝい去の琴とよなり
れほそなるばゝいとらひふ、ひをれくつみて作るものひとつにいふ
る家、よそうたりの、えといそにむゝしのゝふなりふたるむつゝくそひ
ちれは、あけて見る人を作るに
ふる家ハ、古家の集、よそうなりい物語書なく、むつゝくは、ムサクロシイなくそ

ひちれそ、世とものなり。　なるゝにたる数や平にら
うたつたふ、ふことゝ、をざと、たきこゝ孫一人、侍平に式部の丞宣
のちをふる人をことゝふれ
孝のとゝ、この人長保三年四月辛巳ふれて見る人もこと
ふれとなり
おゝ、ゝをつまくせをてあゝぬるひとふたつひきをゝ見作
を、女房ゆつ、ゆりて、れを人は、うくれそすをはれそれはすくひきな
り。なをゝふ女ふ、まんなふ人そらむ、むゝは、経ゝらむをたふ人そせ
ふゝしそと、ゝうこちいふをさて作るにを

拾遺ノ歌の書ともをいふ。せめてこゝは、ゆくつゝ、なるにうんしたるをいふ。つまくは、タイクワなるべし。女房い、式部のめしつかふ女房なり。たまへはこ、女房とものいひしらふ詞なり。たまへといふ式部をさしていふ。うくたえすれを如ふて、こゝを書らむをいへり。なてふいなにといふといふ彼のこゝを省けるかてこゝを書らむ如はこゝをあてなにらに入るなり。きやうらむをたふこ。佛行をらむこに如はある所ーこゝーこゝ。ゆゑなし。なり。ゆゑなし。ぬこ書をやといふこゝなり。こうこちはこうこにこうこはゲクチなり。

たそすまは、こゝにらる

拾遺けるこ人のりすゑいのちなこうるぬ所らーとゝ。ゑぬなあーなり。

といふ所にくゝ行れと、れまいくぬなりなり

拾遺けるこ。女房とものこうこをこてこ。こ。こ。に。女の中なふこ。絶なとをらむとをこらうぬとこいここ。こひて。らぬこうし人の。命なこうーたゝーもれーとなり。いここ。ひてせぬを。拾遺けるこ人といへり。はこんこひこすくなきと。いふこらて。命なこうるめること。いふなしとこはたゝ。式部のなこれにそたろこれこといふを。をこうくぬひて。いふるなり。こゝに。拾遺けるこ人の。命みーうーといふまてにそゆこ。これと。中法拾遺抄にたゝ原行ゝせんやうにまこてこ。こ。拾遺こ。こすくこ。ぬむやつい。命をみーこうくこうくこゝとゝ。たた拾遺ぬは。命をなくこ。孫ちさこゝ。ゝく拾遺こ。こすーこ。ゝ。とここなといふこるこあれはこらたゝーをこゝ。ひてこゝるにゝ。ゝひくぬなこそオモイヤリノナイにて。こうゝ。拾なをこゝひてこゝ。こゝにこゝをこれをもとこたる

ものいくへんいはれたるなりとていそげてあるとかり。　給ふと。

数ヶ所にあり

いとえたさとかり。ふるつのことと。人ふるうてことくかり。ほうこのたきて

くしくあちらけふ兄申る人あり

いといらるつの事にてさとはぎの。拙いとける人の。命なるうてなめしもなに

をうけて。命はさなに。百事もまたさとかりとなり。ふるつのとき。ふる

つの事とも。同すちのとも。をくに人にうてこのうなしにこのうめあてもく

なりとにてあれ。事不事なとは。拙いを拙いまるはそうるはきう

を。とうてにへるなり。さしそゆな書ふむ人にをたのこう。それをひのある人

はかりてほうこのにきの人あるとかり。さそおのをを。百なりことうて。

ほかこうのうりうとふくそう。悪人とそ。次ふまう。我身のんもちひのある

ものを書のへなり

ふるつ門はきくなる人の。はきそことはきまに。ふるてはんでひきはが

しあてなひごちふくちひぐくうし。ずのれとたうてなどんとふつきなく

兄申るとさなり。とおひはて。んふはうそうをきことをえうるばうう人

よめふをうんにつむ

ふるてはんてひきはかうしいふるすきひなうし古反古なり。紙家七綸ふ学ふ

りはる女とにて。れてなひうちふきを同書に。仏を焼りする女とにり。いつれもはは女のうななり

ひくくうしい事。本きに。ひくくきわなりとるを。おのれ拝ふ。信そにおをたきぬ

なりといふとかりとにて。紙ふみ。長仏。なとはたはすはひてるを

り。とえたり。ふかき。我人間をにたることをえめかき。たつうふを。えら目
にそうしてふかつむなり
間して。人の中にまてはれそ間所にてことを作ることれをやとれは所
え。ふう間しに人ふは。れひてやくなるへし。拙もどうちし。我そとく
益
へる人ふまへにはうるさけきはそのことをもれうくを作る
れやれひそはうるまとりて間をふるたるなれひて。今の信かそれひ
てもとも。文まをつけてい言なり。拙もどたい人のいつとすることをもどくに
てゆノさデハトホサヌことをいてうちハつけていてをなり
ことふれとを拙のうたくえたる人はうたし。たる我人のたてまるすち
をとへて。人をハなにかなにめりそれんうほかのまぶれもうげをは
溺とえれとえそうにさうむうひすまねたることたふあり
れともえうたへ係りしいハ助まなり。拙のうたくそのもれそうたおのお
のうたまを。様とのおのうたいはうのうたまを。様なりすへてう
たきとはあまたあれともとふいいもとえうたとをいふ人をなに
になた人まを。ちうとふひたたし如房をいんうまとはまをに我ん
のを人をなにかなたうちのんうとほうまにていうれたうけをえはと
えれといはまを。ちうとふひたる女房を。さむうひては武蔵のおを。まつ
うくはまにえゆれといまをなり。えをにまをにまをにまをうけふえ
れとをえをまをうとなり。　かためり。数中にる
ちうくさへとうれしうれとそはうたふはかう孫とむううとれも

ひて、ほけられたる人ふぜいとなりえて、位をば、うゑは、行ひそうさうに

あるえ、えさうにさしむひかてのさまなり、ちゐくといぶふ、ふてなるちうとを

ゐふ、さて、ちかくのとさへとりかへとんれと、そつうきまてにそかつ、孫と、酒とは、を

とる所きとなれは、そもとるまうたらをいえんと思とむつうとおひて、

ゐえ、ほてかるなり、むつう、あえ、メンダウナとつえなうれたひてはなうまて

へ保ひ、ほけられたる人は、老ホレタル人ふなり、うう、いさ、拙さとう、女房にを

とる所きらをもゐえ、ほうれたる人ふな、えさあれは、ちうをのえ、ふて、

ゐふ、ゐへる、我人の中は、さやほそかつあををうはれしそうて、ちくさとるしけ

に、ちうとふひしなへしと、ゐへるに、ゐのちうとふ、ちううたえて、ところ

たるかり、さて次ふ行てちうたるさ酒と、用に、ふたるとは、ゐたくたうひたるらをを

ゐて。　さとるれしふ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ。　むつうーと、ゐ、ゐ、むつうーくとに

ゐと、えんふ、えは、うーく人ふ、ふえふくけに、拙ちくーとうあーて、拙えたり

このえ、らーめに、ゐのうちに、人を人とをれもえに、孫たけふ、ふれとえんもの

とな、ん、れ人を、ゐひたもひてにえみーを

ゐえ、武新に、ゐ、さ、ゐ面せぬ人の、武新のさ酒をおーえうに、うくなえー

と、人の、ゐ、ゐるらを、ゐへるなり、拙ちくーとい、面ふ、ゐ酒ふ、ゐ、ゐくーえ、ふ、の

ら、ぬなり、と、ゐへるに、ゐのゐ様ふ、ゐうーとえしたり、えつうくも、人ふ、ふ

にくけを、ゐれ拙ちくーとさ酒なり、ふ、ゐを、ゐ、ゐ、ゐの人をなり

ふ、ふ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ、ゐ

以ひ作るに、きつうく、人ふうう、れんそけものと、見れとされてけうとは、
れもい作ふとたてこれをうう人とな〜ひもてなー作る
足原四天・紫西せうー人の武新小紫西ーて足原四天なり、れんそけものは、
年老ていとそれふ足つけ〜ていさ海を、名月にーてこのころうく出るなり、さふとおい、
ものとは、ほのこ、年老たるにそあ〜新とあ平ーてれん〜うにて、おのほけ〜ふ
たる人のゆ〜にて、あるさ海を以へるなり、師のいそれたるいれん〜けものとゆる平や
らう〜ん、れん〜うなるものは、人のあなつりて、作るれさ面を、見れとされふにけ
と以へるなる人ー、れん〜けものうたん人ふうとふ海にをうく立へり、京れん〜う
といへふはなり、れんそけと以へることなりーたこふを、うんとなるひもてなー作、
とゆへにれん〜うなるを、うんとーてなるひもてなるをうけふといそれ

きれとされふにけるふいるとらの元なるうんといれんそけものふせられたる
やうんの中をにーての元なり、まそふかうこれをうんとき、と出るは、あに
んうう上てなん身をと作ふ見ひ作ー、と作るとは、とたひて吹れと、お
なるは、中夫を仕のあれたのんてもひの海ふは、とたく海の作う海を以へるな
れは、ふれと、本につけてのんさちひうんあう海なるを見ー、　こと人うと、
数や平にうる。　れんそけものの数や平れんうけものとに
ありさ海、文の中人をんとうちとけては見元ーとなんれもひーこのと、
人うりけふむう海ーうなりふたること、との作そにるをうく作り
ありさ海ふ、我身のつきのあるさ海なり、れ生、ものふなのこなり、うちと
けてふ元、作のううんなり、人うう、中夫の武新小の作ふ作用なり、あ海さ

まゝふ女房たの中に、雑の人らういきてもつてうなりになりとの給ふ
かゝり、給ふ義はあるまじき事ふつくうたらうんらえいきうちとけてらう中
文のれ詞とすへしといえれたり

くせぐーくやはーだちそぎれまる人ゆを、拾ぞめたゝ仕でな
らはー

くせくーは、癖ミーにてらろつふ一くせあるさまを以て、さそくせくーしけふやさ
ーたつをれふ、毛くーとやさたつとふたつふそゆゝに、そぎたの仕ほは、祇
も大うたさまるものゆて、さまゝにするをあなたのれんゆそはつうくふー
めはをそちれをとはへう、そちれまる人、師をくこの人とふは中宮の宮女
たちを以うこれそ、赤、文のれすへのうちとけてはえくーとふひさとの給ーら

りつたる文ゆて、文のれすへのゝなゝ、文のまち給ふ宮女たちふ、武部のを
そめゝるらーを以るなり。そのてにそはをめとゝめて、えゝへしといえれを、拾は
めとはゆはーくむそれて、拾そらう、えるさまを以う、志らはれたうれて、
まさーくはむうひうたきまはなり。キツカヒナとふさまなり。たゝれてそだ
てゝれはゝそのえゝなり。ですーてこゝへしさて又、ゆふこれそゝるんとなゝひも
てなーはゝ、ふふ、拾そゆあたてれで給ゝ、はゝ点るは、とうく世の人ふ以ひさて
のれすーてたれはゝふなふとゝなてゝ、はゝはほーとふふさまなゝーしう
ふにつけて、吹こゝらはは、拾そのの人のあゝさまを、又うこのへたく
さまはらう、すへて、人は拾はゝくうふすこーんたきてゝとやふ、拾ちはぬる
をゝとゝくーてて、拾ゆをゝらーも、をうくうーろやすけき

帝本紀にくしろたくしとけ死ぬふつくはうまへのなさけそおのつう。
まとつけつへきことをやとんへるにたのたえかうゆえとりーと点へるやうて。
うまへのなきけふあさまう

そーは名めうーくあたくーしけまとゆ世の人うーくをなくうたえー
ぬため見えにくうさ海をたふなくぬれはにくーは作る海ー
さえ一種の女のさ海を出てゆ世えウてムキなく。くをなくハどろきうたこ麻
のなんをしてへうたをーのなまとはうたをーにおる人のためうたをふとうる
へきさ海をたかーらうふかるほとふなるぬれそとふえなーにくハをえ
めうーくかるくーけはとあるくなれそにくうハ作るす

我はとうすーくくちとち帝きことくーくうぬる人そたをたふつ

けてうふかうふせくーほとふ我の人ふはめとぶ海るめをーとぶめはれ
ば。ふかるにかのをいくことはの中にをこそかるふる海ひたちてふく
うーろでにおうかるに。をそは見はけらるこさに作り

これをこ一種なり。くをーとの河ハきふくうなる云の河なり。と師それれなり。
帝本紀にほーけつきくすーうーん我。枕草子に拾遺なとくをーうする
もそ。きこあふれたをる字法拾遺なふ見をたをを考へ合はへーくちまた。
陸奥くくちをちの。もちはめくをちの。ちに用。につをの字にをふ河つき
も。帝ーきさ。くをーくーみたりなーぬ人はをなたふをらふれをーるをれひて。
これ一種なり。うくみたりなーぬ人はそのくをの見をうたきをのかれとめをとと
むしは見つけらるくをーを出りといそれきめをーのーは助をなり。をそかるふ

るまいにもとゆるへきをおほ二のにもにうをおほは有けりうーろてハう
つほ物ゝかうちあゆをんるうしーろてゝとゝれし松草まにすきゐのまけてゐる
うしーろて有ほそにそん屋へをたり物ゝかうしーろてをえたるになとれつれ
ゝウシロツキなり・くせおは・くすきうたの癖をんひてゝそしゝを打ゝとろきうた
の癖なり・さて・うゝ・ゝとゝ・ゝ物・家のうち・家はふとうまーてうけるなる
ー・ひとうはれつれゆゆれけつてらけん　くちもち・家・くひもちとに
物ゝひすーしうちあそゝなりぬる人と・人のうへうちゝとゝめはる人と
は・ゆーて・みゝをめをだてゝうをまにゝ物・伝へけき
これを一物ゆ・二ゝなり・物ゝひをのうたを・言と・行と・ひとゝゝをゝ人
のうへをの方は・秋流の中物ゆの人なり・ゆーてをは・家の・物はとくすーく

をの人たふめゝとゆるをうをうの人をのあうゝ海にゆゆををとゝ・されハ
ろきうたの癖いゝらくくえつけつらをはをはつらをはふをれをゝれをゝ物ゝ
てをゝふゝたのうゝをゝれなり
人のくをなゝうきうはゝをゝはふをきをとのをををきうをえーゝをゝ
なげのなさけ・はゝゝ海ほーゝう伝う
これを一物ゆ・ゝれをゝろきうたの癖なくてらゝをゝふゝる人ゆは・ゝきうゝく
てをゝうなきをとををゝ・ゝをゝーとゝうをてあるなゝ・されとらゝ人なるうゝに・おゝつい
てはなげのなさけ・はゝゝ海ほーゝとゝりなげをなげゝりさ海のをゆをゝ・ゝふれれ
ゝ・物ゝふれゝ・ゝゝ・ゝ物するをゝなげのをとゝ・ゝ・夕・物をゝになげのをつ
うひゝはけたるをの家・自文・をゝにをうなくなげのをゝをちーーゝ伝ゝあゝうを

根ヤ、ネニ、なげの、ゝ人をなふせさを、結そ、狩衣、袖ゑに、なゲのあそれをうけく、
人なふ、なとあると、金セ又て、ゝ、へ、なさけそ、ゝにもゝへるとく、らろはにんを、へあ
をれひて、ゝなるは、ゝふれたゝる、事本、まそのうを、へのなさけそ、たのつう、をそつけ
つへきをれをや、とゝると、同く、ゝ、にゝれ、なにてすき、ゝふふ北て、んを、へあてすゝん
しらひなり

人すをそ、に、ゝれことゝ、ゝ、ゝでは、るは、ゝろをことを、あゝやゝちたゝんも、ゝれひを
らえんふ、そ、ゝうゝなゝ、たほゝえ、ゝ、ゝ、ゝ

ぶこいふうりてそほる佛たふ三ほうを我〳〵師つこはあきしとやはと
き法〳〵なるまんてうはうにぶこうふうに世の人て程ほき人はほ
らうう如へ

三寶は佛法僧なり慈悲ふうに佛たふとそのを三寶を誹謗するつこをあ
さしもやそとに法つるあさしとはとに法を法ふうき佛なしはのはう
り法こそこのみはとうめ法〳〵中さを程佛なふうりまてのはりにこと
の元なり程つこさきい我ふほ〳〵き人は程ほ〳〵き人としてあへ〳〵といい
ふ元なり此のつこきはムニイ ウラメシイなといふ元なり此てのあたりう
書に以德報怨何如といへるに何以報德となにうかたへたるを法ふう
らいたり此た清女彼をとに元とを法あ〳〵ひめ元るもつこはう〳〵ん点いな

うう〳〵ふ〳〵とんつをけふ人の事情なり
我ふをふ我ふこきとの事をんひつけむうひそけ〳〵き
我ふをふ我ふさきてんそんとんそ〳〵ひこ
あ〳〵うきそうろそにともさはあ〳〵ほ此てうく〳〵うそへはなたう〳〵なる
とのけちめそ人のほとそ元そ作るうし

我ふをふ我ふつこき人をふふ我ふきてんそんとはつこきむ元に我らうきそう
さ所ふんそんとその元なりんうきとのそつこき人のためふ〳〵くあ〳〵うそへ
きとのそ作りんひつけはんひ子毒そ人ふはるをふ式そ所をそ人と書へふ
てけきあう拘ふんそにきそうそにとそとへるにそれひとつのさ所なりさ
てきそうそてとなにのたけきとかはあ〳〵んとへる元ふて次の一のさ所となり
へてんつるさうへのとそ〳〵次のなたう〳〵なるとのとそ〳〵一まて〳〵移てさはあに

ゑは、これも、まだ、まゝに、けゝきたちなる、あはれはあゝて、つゝきさまをも、そなへうく
しうそなはなにともなく、なだらかなるさまゆゑ、みるまたのさまなり、この二のさまの
けちめ少なく、人のこゝのさまうたとうの所とは、天ゆうとんてるなり、なだらかはれたやう
なるさまなり、又所のいそれけるふうそにとゝのゝのまは術なり、ふかくさまうこゝに
と、ふかくなだらかなるとのけちめ、こんの所とは、天て作るとふ文なり、とゝとんひて
は、さゝにきこえに、文をなさにとんそれき、そこおのゝとんらうん人そ作り、悪
悪ふうそ作のゝをも引出、たく作るき人は作るき人とてあるべきやをこ
とうて、そつゝしとて作るにつきそけーそたつと、なだらかならとをくへて、
ゝの作者とは、天ゆとんへうなり、沙のゝ、表の内作そ武紀のなあふつき人なしとゝ
きうて、いそんとにるさまそ、孫そ、こゝふゝの所とは、天て作るう、とんへうもなた

らうなるうたを、作りたりとするなるへし、　さし、数やにて

さるるのなんーとゝふ人作り、あやしうすゝろふらうにたゝいけるを、
えーて作るゝ、ゝうそ作るとのたはうきこえ作るー
あゝしうそんうなるとにうとフミギニ品ふ、なり、らうにたゝひけるそ武紀をそ
孫を孫ときあきさのふたゝいけるなり、さしとさるさまそ武紀のちゝあ作ふ、
この内作のうそうとのたはうきこえそんてなり、ふれ
帝
うち死うへの源氏のうのうたり、人ふらまを作ひて、きこーめーけるふこの
人は、日や紀をこ紀をうみ作へけまゝ、ゝことふこえあるへーとの作をそけ
るをふとたーそうふんそうなんさえあると、殿上人なとふんひちゝ
ーて、日や紀のれ津作孫と紀、はけたりけるふとをうーふ紀作る

この人々、源氏物語はさらなる式部なりとして、帝王紀伝、編年体の日本紀、国史の正史の注釈なるべしとなり。されど、なほ、ものあはれなる、はきそめて、ものみなる人はけれの深くなる人に注へけれ、つれの中に、ものうくあれとこはきそめて、ものみなる人はけれの深くなる人に注へて、注へといふ詞にうる係、そなさしそなり、さえ、才のまゝなたらふれる人にて、学問のうたのさえなり、ふとたしえうにて、るの左右内侍のたしえうになり、れしうなんさえあるとは、内侍の、左上人なるふれひちゝにとそなり、侍中、帝とにさえうあるとあれとれう、今数中にがそなるふらうたれと、帝いさえうとあり、を張りにはやさゝは、帝は、才なるへしとの注ひたるを内侍を、をたしえうにざえうとさそなりてさそさうに、左上人なるふれひちゝにものにたしえうにとあう詞をとうくうれへまそなり、とうの源なるはうえへふはさえあるとほめれへるこ詞

にさそにえ、女の学問なるそうるをそうまそれへる云なりまそ帝紀編にうるて、日本紀の局と、ものくとまるるつけたるなりとう帝の作せられたるものの、要しきこ詞は、日本紀局考に云をなりとれうけれをかふは有けりをうるうえ

可笑うたなり

おのふ風さとの女のまへ出てなふいつみ作るとのをさる所にて、まえさうしれを作るんら

ふ風さとは、我里亭、女をつうへ女なりいつみ作るは学問なるさ詞をなり、学所ハ内さなりをれふまをさうしを作るんらはれこそる所にて、まえさうれて、まえのるとを、作るんらとれへるにそたふとれ、そうに内侍の学ものれひちゝ、要名つけなとをしとをそれとんうくつるきらに出る云なり、らハやにをしの歌

息の声なり。この詞にうつしても、まことうるの浦うなる（へ）らを、おもまま

この式部丞といふ人の、わかそにて史記といふふみらみ侍りしとて、

なりいて、この人は、おもはうらみとり、ものすることかぎりなく、あやしくおもはせ、さ

とく侍りしこは、ふるにんぶんなるおやは、ちちのうへ（男子）をのこにてもたり

ぬこと、えないなうけれとも、つねふかけうれ侍りし

式部丞は、式部の兄の惟規と、侍りけり。史記はこの司馬遷のはくれる書

なり。この人は、惟規のさはなり。あやしうとくこそは、こつうのさはなり。ふ

ることにんぶんなる親、ゆゑ為時ゆゑ、系図のあふ、儒者といへり。まことこの人、越後ち

うり、淡路になりたるを、ふて、筑紫にて、越後になりて、後世徒うり

うたのまに、くそううたるを、ひつまの書にも、越前、越後のけちめ、ものいい

きさはふたをたきは、人くそうんへり。さてまたあふ、うくこつうのさとたらーをん

へる、ものふうにて、人ふえするものふは、いうふをやたもるれとも、次このさはをれえんかは、

うくうそは、えある侍きさなり。

く、紫式部にる　史記とふ、紫式部ととにかく。　さと

はれをは、ものとたふ、さえこうぬる人は、ふうふ、はやそれやこのなりにのみ侍る

めるらと、ものくく人のふしをきてとあてのち、一とふしをなふうとたー

侍りにふとてはふあさ侍ーく侍り

はれをは、ものふるうたをれふ、さえうぬふ、えんるなとの、うに同めるられら。

ひも歌息の声なり。ものくくを、ものふ、惟規をうくもとにとれは、こつうくもを

らはなるこーれたり。さて童うり、ものくくれたれかなりて、指のふをとうて、ものく

人のふしをとりてよめるのちこそ人ゝなり。てはブチャウホウなるさほなり。雅
語訳解に手推うといえれなり
うみ〳〵ふるなとんひけんそのめをとゝめになりて作り〳〵にれらくこそ
所ことをて作りしうはれうふ人をはかへてに〻〻んとまつこ〳〵さ
にれひそうふのうみふうたることをたふらほぬうほを〳〵作り〳〵を
めふとゝうにそ是白をてしるをうろ〳〵と見とうたるにうてなり。そ風を
は。集の内作のさえうぬうら〳〵かれひたるれう。人をはせ光の人をなり。にく
むんは。式部をなう。うゝい。上をて。上つうなの云なり。侍注小紙〳〵たるひうを
なうさうら〳〵なるは。たうふれひそうふにとあゝ〳〵。ほさに。紙とうんはつたな
〳〵。詩本歌ゝ。下にあるて。上小詩なとのあるをいへうといえれなり。うほぬを。

紫式部七論に。えらほぬとゆるのたら〳〵
文のれをへにて。文集の所くらほを注ひなとゝてさるさほのこと。ふろ
しめさせほ注〳〵げふれほひたる〳〵のひて。人のさふ〳〵えぬ。
と注ひさくにをとゝ〳〵の文こころうう。楽府とゆゝふみ。ニくうんな
そ。ふとけなく。ううを〳〵たてさあえさせて作るをうく〳〵作り
文集は白氏文集にて。この注れたくさをゝ書なう。うほを注ひは式部に
うほめ注ふなう。さるさほのことは。詩文なとなう。ふろ〳〵きは。道長公の
さうにれほるなう。れほふ。ろなう。いめの作うなう。をとゝ〳〵の文ハ。寛弘四年
の文なう。楽府は。文集の中なる。詩の一体なう。ふとけなくは。トリシヤリナキ
にて。人ふう〳〵てを注ひよく〳〵ふを〳〵へ中さほなう。　楽府。新乗。軍に

ら　をへたてこれも同

同上
えをしのひさせ給ひしうと。屋もうちこ。寄きを。ゝせ給ひてれ
ふみとも。をめてたうせ給ひて。屋は。寄ゝ。せ給ふ
うちい。寄なり。おそうへとゆふことをきてゆ。おにもうちとふことを者きて。
寄きい。書ちみ給ふ。寄きなり。れふみとは。ゝるさ酒の。稀くの書とを
さへ。こせ給ひてい。人ふうしめ給ひてなり
酒てとふ。こうら酒せ給ひなとすることをたこの。もれひの内仏は。
えこうさゝへ。ゝ。ゝりたゝ。はれうふ。ゝ。ゝ。ゝ作ゝんものと。すへて。せ。中。
ことをさ。ゝ。寄く。う。ゝもの。ふ作ゝうけり
ら酒せ給ひい。武。敵の。ゝ。ゝめ。ゝ。ら酒せ給ふ。ゝ。ゝれひの内仏

はゝ。ゝ。カ。ミイ。内仏の。ゝ。なり。ゝ。ゝさは。寄。と。業とふて。古今集の序にゝへると
酒。されは。ゝさくのとふ。ゝ。ゝ。とこく。人。ゝ。ゝれ。ゝ。と。すへて。世中とゆふもの。
うゝもの。なり。とゝへる。なり
れふれ酒。ゝ。ゝ。ゝ作ゝど。人。ゝ。ゝ。ゝ

あさた仏かさと阿弥陀仏をまる師のやうに思ひたのみて経をよみて修りすさ法をなるひ修るんとはいへ共世のれとそ死とはれとそしきうたのとれりんもと法にいなにとも思ひれまぬなりひしまハひたるにせをのられたるれてなひ人をれ〳〵りこの若紫まにれその井にいりぬたるひしまと枕草子なんうろなるとれ係のひしまのふるまひなと見てたるとを見てふるへしさてさるとれかなるんかきひしく思ひとりなるとなれはれらく今はとかるをうはけたれすへくをかるにとあるけたれい懈怠なり

半くひたるちかれをむきてをほくにのほるぬほとのたゆたしへきやうなるに修るへうなるをれにやするひ修るなり

なをまたあかれたくんをとうなるけてふるく思ひたれとも見ぬやうにも思ひたちうたきらをれ〳〵半くひたるちかをむきてひしまになりたるうへにてもなりにのほるぬほとは仏祇に重荒菩薩の末迹なるて中にのりて桂樂かれくをいるなるへくそ云はひしまになりてもしなぬ同のたゆたるへきあるとあり法華経に紫家七論に式部ちんの所なるはそやくを蜂尼衣のとくなるへきを二人の女にほたされて中云なるぬ文つこいまことふうるもへしとんへるさ法なり法華経にはつうたふさたまうたきさ法をれふやするひはミアハセルなり

とくをたたらるれほとふなりまてを法うるれたらうれれほまて

たためつくとをきやうらまに仏をれとたゆさまさうに修るんものを

んふうに人まのやうに結れとれまはたるを法うたのことをそ思ひ

注

ときに年齢も道せんにおとるかなり申くとかりなりまた国ろいなりまされるかりれはまたい老てほまくしたをかふそためつとそこの徒に
うにとも解うたり。新かにそめつにそ。ゆにそめつことあしとも。釋さこ
えさたり。そ一の法ゝなとあるへし。師伝にそめつにそとあるかりとしたれ
て絶らむは。たのとにてめつしけなけきとれたりてれりたれはまては。
めつにそ。絶らまた。佛たは修りのんもたゆさまさんといふ云にて。世てた
りとれそれをんふうたい。佛たにはひはは。人あさうぬうたなるにりて以へ
り。人まは今ふと同く。卑かーてんへるかり。この云は。我うつたなに分に
て。佛たにはんとは。ふうた人のすさ海をゆまふなしといふかり。

おそれ。はこふうた人はまたこのゆにもこのなひ作しさとのらあるこ
とのそれはく作まは。らろつふ法をまてそ。ふりうる作
おしとは。道せのうたをさてふ。はこ。罪業かり。ふひ作しい。道せんと
ふんにをふえにとなり。さてのらそ。未せの因縁にて。現せに報應あるをん
ひてはそ。我うく道せんと思ふたゆたなしきさりかりて。するやうにも云せぬ
は。未せにさ所へき功徳なて。現せに思ふるのふひうたきを以へり。さてこれ
ひきなにふふひうたきとのあまたあるをたはくふんへり
れこみふ。えうたつけ作ぬことをらたもかしきせにあることと分
ふうへのうまへ出てものうにさこえさせたう所はうる作るそうし
れこみそ人ふ老に消息文なるものにえうたてけぬことをものにうたてらた

とゆーちもとゝ咲て老花を保し上の方りになりくと書ゆてた
る人のうへあしせかゆると我身のうへのことを即てれ申てゆろはふつけて
そ元しう侍るとゆへ侍てなり、おのれ之みふ以下、次ゝに見をなるは、清良文の詳か
て、おのゝくせはべちふ、まふふうにて、それかをへて老になり、まて老にうたそ以つ
うたはゝあしんそ方をうされは、空をそれひうたきをなれとになりへたてなくむ
つひをそたる友たちなとのうたなることそ、ふれたり、そしいむすめのうたの事て通へ正
月三日に戴餞のをうに如房とも記すうたうちを以へは、今侍てしく月に又たる
さ侍ふて、そえたっさ侍を、まつうにて、そを次、牧中家うたの如房のかりさ侍うたち
をれひて、そをてにおゆとゆふ人乃琴の様にうそさ侍にて里長しなを以い
て、中家のたの如房のうへをとちをて、そを次、秋虫の中ゆれて、あ侍をの人のうへを

つうくのうへをとうにて、老になり、まて、うく空めて以へは、又以戴餞のをうの大納
言君、宰れ君、宣方君とゆ、三人のををれひたるそにこの次ふ、人のうたちをうたり
ゝをは、拾遺ひまれくや侍へきゝ、とゆへるは、ふにこの三人のことをれひて、又この
次ふ、俗の人これををうたりきこえんにれ、とゆふ君なれは、ゆの三人のををを、うにて
見する事なれはなり、されて、上のくたりふ、仮、詠へ、詠るなと、すて、うやまひ祖の
れとれほるふを記ゆうにて、人の詠ふ、巻にをの方れをなり、さしと、このほかなに点き
不にと、仮、詠なとうやまひ祖のれこれとを見をなる、たうたつ、和の格にそたうへうを、これ
人れふうくをふとれり、れてうくたすふこの人は、すて、んもちひうんのほと、今
さくなるやうかれとうの人はそれとくこうなれはうをたくーさ侍なるうちくハ
日記ををくうこうやまひ祖をあくをて、そ一人のうちえたんにも、まにくう

中ゝ死ぬ事なるわをあんうゝ。そもそも。師のゝたまはけるハ。ゝ。ふ。ゝ。ふ。ゝ。ふみと
もめてなるこゝを。ゝ。ゝ。ゝ

り侍るを。外へちらすは。他の人の見るをそこなふ。ふしうんはちらして。
そ。他の人の見たる人ふは。ふしうんをひしうんの見れば。人のへをとうふ。
たることなれば。まことに。たくをそこなふ。小のそなるに。おれおほくあり。点上をそ。ふしうち
にあるなりそのふそ。ふそこのなてひるさる。次の俳諧
いのこころは。ほんごとをそこれやりやさうしれひるをなるものやはくりにこの
美しひりにしそち。人のそ。ひるに。うふ。ほごとこてじとおもひ侍
る。ふよや。ほをなることとろをさうたふは。侍るに
やりは。ヤブリかう。ひるをは。今せめの。三月言にはつる。ひるをう。この歌は三月言にはう
は。義経記。紅葉賀。をなどに見えたり。又このひるをと
ふよをくくそ。考へは。おれ。舊説に見えたり。さそこうをは。おうふ。人の形をちひさく
侍りそこうはのもてあそ。人物を。物語あみにひかなどん。これそちひさくつく

まるを。多のひなふなすくへて。ふへる。定家。雛とる。今の世の人。ひなとふ
を。ふくひなとふ。ふへるは。侍奇を。しんか四時を。表一。お房をふるふ。ふくと
ふふたくひをそひをくりてふふれは。雛をは。ひんなとうく。きをおと書るは
うふうをとる。けふこの侍をさてなれも。安永女房。集ふ。ひるなまるひ。蜻蛉。鬼
に。ひるをきぬ。ふ一なのもはなれと。江家沙汰ふ。比比奈など。すへて古書よに。ひる
なとあるに。撮るへきをふう。古を。榜もを女の書名ハあけられとも。こまつにらまるなる
へ一。ふれ今。ひるをとうけりまてやはくりは。そひくなをれくへき家のまうにかう。お
ふふ。家まに。ふつ一。ひるをそ一すを。そをふ。侍へう。をたちひさやをつくう
あつめて。まう侍へるを。なとを見をなり。人のふみと。侍りを。人うれおせる文もその
やつくうのまうにもはてなりとふ。うみふ。きふ。さるをすきひやうの上は。文のは

んとなふてきうめ。けんとなるぬ。今は紙ふさとハうしとうとはり。やはきた
るは。さすに。ケシヤクう。帝ーさうをいかとろきうは。志うケシヤウの帝く
ゆるは。ろうめうーうぬうるふて。俗のひきこあなるんふはとろのーにといへるに長メ
はこおちふんん人乃うへはころたうたのをあてはなー。とふよふとや
けんことも。数なにる
ことさうにれらんーてはとうなるうん。えらみ作ーぬ事く。をどおと
る作ーんふは。なにのはれらんーさうをせ給へこの
ーをうにえとうおくさんへ係りてれ賞ーてえとくうへさせ給への云なり。えら
み作ーぬ事くいうたなのちにふうーらみるにものさはなとに。酒なにて。
らみうたきらーに。甲ーてえへるーなへー。結果義八へふらをせ給ふふ。えへの

なく。とふれきをどおくー。俗ふ。義字ふかきさ。義乃祖ふ。名月ーていへるにて。甲
ーて。えらみ作ぬ事は。義まに作んとふさえなり。なふ中まれちなるらーを
いえをどおちーふふへー。れとーといへるハ名月にーなるえなへーふれえなにのハ
ハさまの事は。なにうえ。ふうくれ月とあてれんれ。きふもあーれとふふ云ふ。れ
らんーもをうをせ給へえたとうをせ給へにれらんーは。えるものなれんはけてい
へるれくなり。今の世にも。ーのこれ。えのこれきのこれなとも用さ酒の祝ものて。悪
周ものにつうえいへるにて。云ハたのこれなり。えをうを。を給はドりノケテオキ
への云ふり。　ことうに数なにらをーなるふらる　平をーをーにとに

このく世の人ことのうへを見ひくてをてにとちあ作きは。身をれもひすて
ぬふの。さをふのう作るへきこれ。なふせんとにう。作ーん

骨をうづみひたあふ我身をすてたる僧一うは世の人をとうく世をノ
あるゝ僧を拾ふ事に世ハ骨を忍ひすてぬこと有うさをあも多なり
因一なおせんとにうえなにせんなめとてこの名にて下にえすてやくなれを拾
けりといふ事なおのつゝみ水ほう寺をへ正月一日よりあるて一つゝきにそ
ゝかて上のくなりハきらくうをそれり法花上のくなりハ我里亭にあるてうけ
さはかを忍なれと里亭にはりたらをとゝまれはさまてそんひうえ
忍ひくて新かにうてをくを三月

十日ゆあのつゝきえだうへたらせ法よ

前に正月一日のをうをうえて有ふうくのけうハ正月寺にあんさるはこの法花
ゆえなふ忍ふなるとゝいふ事ハ人をたれそ拾ゆ。されとゝ世の消息文ふひ忍な

とのやつらにこのまゝ一行ひ一ゆうとあるをえれそほとへたるさ法ふよさとた
ゆ。そえなるハ法成寺の浄堂なるへけれとも寺ふつゝをおしうちのたふうゝ
とゆ。そらは法成寺の無量壽院ハ寛仁四年道長公の建立也。（栄花物語。日本紀略。）
百錬抄なとに見ゆ。この外金堂をもめ様くの浄堂を建法ひたるもこれをもに見へ
たるは寛仁四年以降のことなれそなり。されと無量壽院金堂なとも法成寺内
ゆ一院一堂なれはもとより法成寺ハそもくゝ忍をゝ。されそ
ゆそ法成寺をいふなるへし。寛仁三年道長公おゝ家一法ひて法この寺にこめり梵一
なるにゆて法成寺庭とも浄堂庭とも世にはまうしこめり。法
成寺ハ拾芥抄に近衛北京極東とゝなり。されゝゆ寛弘三年十二月法性
寺の内に浄堂なて法ひて供養あるゝ。日本紀略百錬抄なとに見へたれ
ゝをゝこれをいへるにや要一くいふてゝ法性寺ハ拾芥抄ふ九條河原とゆ

り。ねこのほう木幡の浄妙寺。寛仙二年。道長公の建立なり。同じき十月十九日供
養。十二月。塔供養のてなと。大後。嵯峨御幸。日本紀略。朝文粋。百
錬抄などふるなれと。浄妙寺にてあり。
浄車にて。とのうへ（倫子）人々は。車にはりてさしてたりけり。されはおく
まで。らうさりまゐる。
それには。倫子の御ぶそくおくりて。武部のすけのうらうさ
り。今ゆとの。うらふらて。木幡にそえうに。糸うはほそほけ
まはなく
教化おこりてとて。山寺のさほうにつして。たうんけ（懺悔）たうた
と。おほうるふ。えて。けうーあるひはよ。うんたちあ。おほくはより
て法ひて。すこしーるとゆり法へる
教化。懺悔。法師のおこなさるさほうは。作法多。ちんなりみ
侍なの所ふる。なり。まうらにや。あるにやいとひてのらむへー
師事師
師事されたりーけう化とも。説相。えんく。ぶ人なりー。宗門
をおこりてをこちのひきーなことはなえてうはそこ
も。あはたあり
師事は。和歌に学へたる師事にて。師事のおこなひなり。ちふうくあれは。あなる
は。和歌乃。ふかなーー。説相は。或法師のふへらく。経の文面をよ。説相。説えふ
ひて。経文のあるそれたる處を。説相とふひ。経文の深き意を説えとゆへり。
其人は。法師のうはおて。一事なるにんくくなる。のくておそーーはそ。中ふて

おなじきをいふあふさなりて、なをしたにそあるに、中あのこなりをはなへるこちうひきちはそくされえをう
しなるの十まを解うたり。行基菩薩ハ、法華経ハ、ほとけのこころ、といえれり。されそだてそこる。
なにおふうゝえをにわとうく叫ひうたくなん。情ほふ、涯こうをなるハ、おのの名をえ
てうけるあり。佛経ハ到彼岸なといふこるあれとうそうにてそ叫こうたり。往
文の名をみーうく叫びたるに、法師なとふこひあきゝむへ
おとゝて、度上人、舟にのりて、えれこだつきてあるふこだうのひへう
北はまふむさにむしあけなるとめまへいけふほくりれろーたるそーの
うゝらんをおさへて、文ちまは、おなへう
おとゝて、ハほ東のをきゝり、舟はこの寺のうちの池なる舟なり。れまへてはど
うへテなり

度おうゝうゝ海ふ海のーせ法へうほと、事れ君なと、おうたりしてれまを
へなしはうちとけぬらんいうちとと外とをこうれほとおう
拙うたりしてハ、事れ君と式部点り。れまへハ道長公の四男なんとまゝくきのは
ふ叫をのたるふえあるにあそ。道長公のまゝーせ法ひてれふなしそとふほ
とふ君なり。をうきほとはそうきうゝとのうちとけにらんしてみう
うゝうにハ藤原正光卿ちやうあをを叫ふ
月れほろふさしれてうゝやうなる君を叫まやうたくたまをふ称
におうをほせたるをそうゝをうゝ叫ゆうに大くゝのれまを
海ーまをさにうふこるうちをへんとて海ーれまや、志のひやうふて
のたるうゝーうてれをうゝ尺申まはそにのうちれ人をみをうに

ふ

をほせたるとは、若若きいれつれと、書てたるを、大義々のうち、師て、とは、山えなり、をほせは、をへをのべたるなり、師うく、あそとは、うるやこのなり、若を、舟にのりをほせたるをいれつれ、うたうたふとて、うをうくゆゆしにとのうつんを、うはーあやまりたるものなりへし、かのうくにて、文をなさに、さて、をほせたるを、のぞは、がのえなり、といえれを、この大義々、年老たるさ、ふかゆゆ、れふなくは、ゆ舟ゆ、相應ニ、れふえなり、若若を、の中に、年老たる人なり、れふなくやり、なり、さにふうち、若若を、のうたふに、年老たる身にて、さて、ふうの、えう、をうう、可笑うたなり

舟にうちゆ、れれをは、うをつけ、うんれひたるを、をつけ、注するに、大夫、徐福文成雜誕れほし、とうちにて、注ふ、をうちを、さ、ふを、おられう、れふめ、うーく、又由

舟にうちゆ、うを、人をの、注へるを、又て、たれれか、秦の徐福、ことを、ひらを、て、白氏文集なり、童男女舟中老、とあるを、とて、をあはたの、童男女如、ものの、蓬萊にれたりぬは、とふ、舟の中にて、年老たるを、うこつらん、と、れ、て、ものの、蓬萊、未、たる、大義々、何福、とし、若若を、を、ものを、を、ふ、を、ふ、を、うこつは、徐福、たそうれ、れて、をーく、年へたるを、そ、れふうこつけて、老たるをそひーく、ふ、ふ、れひたるをは、をこにかたる人のれひたれり、ふ、ふ、とれ、人を、をたふうて、たーれ、とるを、入れ、式、れれひたるふ、あーし、ふ、ふ、ふ

そもそも、ふるき史記に、徐福が、徐市とゝなづけて、秦始皇帝のために、文成が、漢武帝のために、ものをのこなう、妻しなさはぬ、史記と、白氏文集とを、そゝ

源へ

池のうへに、ものとうたひて、雲なとふきあそぶなかの月うたの風のけをひきえをんことをおもうゝ、をゝこうゝかゝりけり

池のうへに、ものおもふあひたるなかなるへけきとおもふたる、元はさかれとのくるとは、たゝへは、門のうへなとをとおもふつけて、池をとうへて、ものなと、源氏物語にもみえたり、そこにかすて、清堂にてのこゝろ

源氏物語に、人にものをとのたれらんゝて、まんのすゝろことをもいそきたるは、ものにうめれ、元たかものうれたるうへに、うせ給へる

すろとは、さはやかに、さてもすてゝ、りクワモナイコトはゝ、源氏物語のうちに、すたうの帝をさ、人をはなれて、をれはゝたる式部も、まゝなんなとゝたゝふれて、はなれ、人なへ、次の所、即さるをもて、式部のなかにて、元をすることなり

すゝとはと、名ふゝ、たてれそ、人ものをゝてゝるはあゝしゝを、品よたはをせたまは、

人ふはたをゝれぬをれをたまうこと、すゝものをとはをもなゝしけん

めさはゝうゝとゝこゝ

すゝものは、好色モノにて、式部をさゝて、の居上なゝ、そのこゝ、好色モノと、式部の、名ふたゝてあれは、それをゝる人のやゝてゝるものふせあはゝ、すゝものなれは、張とゝれをゝてゝるものふするなゝんとんゝえけり、柳の枝ふをゝれたる紙

にうせ注へつにらうてやうて柄のえんか味の酸に好色ものとれひ四の句にも折て
とゝへゝゝゝゝと孫の羽なり。さうなる集にも。柳花ゝ紅てゝゝちのこなれゝゝや。すゝと
ゝとゝのみ人のゝゝゝゝんゝゝた。梅屋中ゝゝゝたれそゝゝゝゝへすゝゝるゝれとゝや人のゝ
ゝんなと。梅ゝゝへゝゝと。援拾遺集にゝゝたゝ。たゝゝゝたゝゝゝゝゝゝゝてゝゝゝゝ
レタレハゝゝ。そ。式部のゝゝへゝゝゝゝゝゝゝ

くん人のあるは、たゞとにてそれゆゑ、とはうは時そう
にて、ふさ〳〵のことをいふ、そのえん、我局をたゞさたり、をたゞなぬてゝ、あ
やく、えびなり、ほとゝぎすこの所をいふ、をえてまそは、ゑあて、松〳〵所〻うとなのふ
につけて、けふ、ほとゝぎすの初なりて、とはうたく水鉢なるうに、局をあけて、ま
て、まゝ、ゆ〳〵しうは、ふ〳〵ゆ〳〵しとゝへるにて、道長のなくくを、たゞさ
えひゐと、ほゝを、ほへに、ゑたりは、ふのの所へと、まとゆ、所きりにとさる
りたくとゝひて、美まれり、さしとは、たゞ、所のうへのみふほとらくけにくう
ぬさゆふ、ひなしたりなり、さこのゝは、学の所に、をたるうし、注水義のいそ
まけふ、初句のえずに、ゑとゝをたり、ゑうとはうのとゝ、ゆにそちうひて、上句
をうけたりえゆ、まとゆゆ、所へとにあるうへ〳〵とゝえるう、けふうう
にも、ふるゝとも、ゑとゝをたりゝ、ゆ、ゆ、ゆ

宰せしさせ給へる者なり（後朱雀帝）と云り。日本記畧、寛弘六年、十一月廿五日、丙子、辰時、中宮、於二左大臣上東門第一、御産、第三皇子、（栄花物語、百錬抄、一説ともこれ同じ）と云へる

にて、今こゝに見へしれる戴餅のことゝ、さふくそうの料りさそあそ、去年、十月、内裏、一条院

やけて、（紀略、百錬抄、なとゝ、これ同じきなり）

そ侍りしのとなり。初冠、宴にうちもやけふしうは、帝はいまだ内にたゝ

まれとゝ、へる、即この比方のことなり。枇杷殿、拾芥抄に、左大臣仲平公宅、昭宣公

家云々、と見たるを、今、逆長公の傳、（日本紀畧、百錬抄なとゝ、左大臣枇杷第とあれそなり。）

（東三条院）大臣はのぼらせ給へしことゝ、北はいたはれ給ひ、宰相君、おそれもんの

を、多あひなとゝ、ことゝふれとをこの、義人はだらみ、ひやうこ、ほうう

侍りうこゝろかけたるうたちなとこそ、はすれひそれとゝ、不見、元注へ、

主殿のとを、多あい傍に見をたり。義人は、女義人なり、しとゝふ見を注へ、解

北女房にさまうてゝ、出るなれなる人は、しとゝふすを、出て見申、侍り

たゝそひやうこ、紫式部にあり

わたなしやくすり北女房に、見乃はこをさうし、だちさゝうき

かたり、たゝやくそしる、まこれのことゝなり

くすり北女房、元の今、言侍そ、序藥、屠蘇、白散、度嶂散なとゝ、を供する儀式のあるを後ふあ

いうふる女房ともこれふを後は、西宮、就竹下、をすち北書ともに、そうう見たり。

ふや北そうそい、大学寮の博士なり、さしとこの博士の序茅の儀ふ侍るらし。

もとふ見をなる上にし、うふ、一上にはをそめそ、ふ、やのそうそだちざう

うさふをうをかなりとう、或は、をうてめうをさうたちうをとるなりし、うくうつ

ひるたるなるべし。メとるの所にては、毒の博士の、くすりの女房にてなるべしとぞ。あるべん。されば、毒にて、如実と、北大学寮の博士めなれば、さぶらきかたるさ酒を、武家の、うちやとぬ、かり、さぶらさは、さえうて、とるくおぬぬ、れたなるを酒の、大学博士に、れたるをぬ、なるべし。

たうやく、ハ、侍なにとりなて、膏薬なり。さるやたうやくとぬふは、江家次第に、カウ茱ノ名ヲ忌テタウ茱ー号也、と、見えたり。これそ、言の日に、事とのなるを、見たまは、を、膏薬なるべ、そ、ぬ、ぬ、ぬ、乃女房の、ぬるにそ、ゆるして、典薬寮ら、ぬ、ぬ、のごとく、を、後者の方ふくさうあるを、ぬ、ぬなるべし。　さぶらき、家女房。

さぶらきとに

二日、毒北大食はと、ぬりて、係的客、ひんうたるそ、ぬ、ぬ、ひて、ぬ、ぬごとくたり

毒の大食は、毒北大食とぬひて、中毒、東京京て、人々に、食を賜ふ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬへるは、中毒の大食なり。と、こ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬとあるたるは、ぬ中内裏にて、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ

マカ侍へり。添中納言（後賢卿）ハ元冬朱雀（経房卿）・兼隆卿ハ中納言なけ〜ハ元冬ハ上人ハ元の上ハ侍さ侍へり

傳大納言ハ大納言ハ東宮傅ハ元冬ハ侍従ハ行成・行成ハ頼通と〜元冬ハ蔵の侍従なり。　むとして・新中宮にらる

ものうえんたき物ハ中ハ侍りの事ハ人ハ中ハ侍へ

みき中ハ中ハ侍へ

ものうえハ・後一条帝ハ侍りハ・ハ侍ハ・道長ハ公のなり。次のとハ侍へ〜ら。

きんのことハ・ふんたる・裁鉄の祝詞ハ・余　車カタカレとの祝詞なへし。

ハ中ハ侍りハ・帝ハ侍へ・ものうえんたき物ハ侍へ・ものうえハ侍へ・ものうえハ侍へ

てこの祝詞ハ・ハ侍ハ・ものうえハ侍へ・ものうえハ侍へ・ものうえハ侍へ

うつうみきてさて侍へ・新中ハ侍へ

帝うへふんとものうえんたき物ハ侍へ〜人と殿の侍ハ侍へ

て・あとハ元なむ・ものうえハ侍へ・ものうえハ侍へ・ものうえハ侍へ

なとハ侍へ（兵）

ハと・ハ侍朱雀帝ハ侍へ・ふんとハ侍へ・ものうえハ侍へ

ハの侍へ・元冬ハ侍へ・ものうえハ侍へ

て・ハ侍へ・道長ハ侍へ・ハ侍へ・ハ侍へ

むをハ・ハの侍へ・道長ハ侍へ・ハ侍へ・ハ侍へ

さ海ハ・隔ハ客の人ハ・道長ハ侍へ・ハ侍へ

う〜ふまう侍へて・う〜帝ハ侍へ・殿上ハ侍へ・ハ侍へ

れ入道殿を法師にまうしてこうくろうかたるふなとれてまこと法皇
へまれあるひにめしつるにさまつまこそ侍れ侍らき酒うてにけるしうみなりなと
むつかしう法師さふらそうたひしつはまうつ海つきたやのうそくにそいつ称
北日なり。ちめくとてあさを法師ふうちれてんにいとうたえなくも
うへふは上つうたかまつまこそ式部のうれりいはそ家の侍家平の中
日のをりにて忘を法ひて家のれてにてとの法へりたを忘を法出をほうう
えれつ出西なり。いうをたりいひうをたるとれりにて侍ふきとれり上京れ
り。もつまこを法へるはホゼラを法へれり。平本出をにうをんやとむにうる明石出を
に。むつるめりなと系図。式部を。平にれをけをとを上京れり。たやのうれり
にを。れをつまこのれとにて。中家のれ報のうをふ家らをんは西目侍へきとれり。

道長公詞

とれ上京にの法ふなへ。いつ称の日は。家の河海抄にさたれるを稽なり称をと
忘て。れの師く。常舎なちたるをふはあて。たの日なりの忘なり。されいな
にをうう北にたるとのやうん。ちめくとせあきを法上侍うちれをんにを式部の
でれて。家をうちれをんにをうたをなんとれ上をれうふを侍。ひしれ
と忘れ上京にをとり

いらなをうふれを忘ひをめれはれとれ。あひきらけふ。ほうけそれやうふあ
らはほしをて。とをころ。家のすきほ侍けふて。ひとをころたをまたをさ
うくしく忘をまをしにうくむつの死をて。ひたりを忘ふ忘をまをうを
をしけれと。れほとのををうたを。ひきあけつ忘をまり法上
いらなをうふは。いらなをれり。けしれとををけしうに。れほろけをふを忘をを。
れほろけのををとれをと用を。ふを。をしくれへり。とをころをを。

道長公の御詞なり。ひとゝころは、後冷泉帝をはじめ奉り、左大臣、去年、後朱雀帝、先
帝を法ひて、二条院、さて、表をいふ。あたちは、ゆるの二条の高たちなり。ひきあけ
ては、れ金衣なるべし

殿へに小松のなりませは、とうちにぞ、殿上あたらしうんとよろこ
ぶ。ふし、此人、乃あり、高めてたく、おほえさを殿上

殿へに小松のゆ、拾遺集に、景式、きゝ、ゆ、ほる殿へ小松のなりませは、
ちゝ、此ためになるをひう高し。とゆるをにぞ殿上、此、この若、高たちを小松
になすべきなり。あたらしうんゑ、あたらしくらみ、たんとら
りを、うく古奇のなりにあひたをを引出たらまうたり上へるゆり、なりふし
此、人のあるさ酒、なりふしにつけて、んしらひゆる人乃を引出たるよりゆる

に、人のさ酒、めてたし。上り、おほくさを殿上は、むの小様小、殿上、おほえし
上へ上、中に、人小出さを、高なるゆりゆ、上をなるよく、小を道長公小、他
の人に、めてたく、ゆえれさを殿上をいふ

又の日、夕いうたいつしうと、うほうたる事をいつりつけたる、彩、此ひ
ほさにて、ゆくゆたる殿のう人のほとをほのうふ又て、中つきめのとら
へれ、れくちすさひをめてたこゆ、この乃命婦を、もて、ん元て、うとくしく
は、侍る人なき

又の日は、正月三日、いつりつけたるゆ、ゆくゆたるをひたをゆ、一の人、此、枇杷
殿のさ酒、ゆひ、ゆ人、れくちすさひ、すべて、すさひとは、浦くんふれ、れすして、う
きめ小、物するとをいへり、なそ、殿へ乃小枇杷殿、殿上、れくちすさひなり、この

今帰りはこそとかりしこそを脱ぎなるへし

あうさ法ふ法こそ〻こそれれんうは正月十四日その時法ゆくに

かゝる衣あけそ〻そたりくなりたるにやあり注へり

二文い抜朱雀帝の帝れたためにそ三文なしと中文の四方につきて二文と

はやまし帰れ文十日日本記畧にも正月十五日乙丑於枇杷殿皇居有二第三

皇子御五十日事とそたり

きれのたなし一ふねたりふたりれいほ孫をひとつふあそそてこうた

みふさとれるほとをすむひとたひにやありてはあすそうをへた

てにてあり

さとのるほとをすむは二人のうち一人里にやそたるかとふのうたる二人のれひ

とふあそせたる法やあるをれしふ

度そうたそせ法ふこうたそに法ふ女人をこうたるはそなとそてにそさ

れとたまをさ法うとくしてとれけまは人やにそしなん

うたそにそ道長公の詞をそうたそは武衣とかかるとたうひ歌りあ女人、

もそとは法ふ女人はうへまそもうたるふ法ふとれふ云にてこの二人のれと

むつまけふ抜れしたる法をそあうの法山歌りうたるはそは法ふ女人を

この二人にそしらそとをとれふ云ふ云ふれそさにそとれへりたれそそ侍宰

れ女房とそたれを云れ中ふそそまにそしそふ云そうとくしてとなけ

れは度はさやにそにそのを法へとふ云へり

日たけて法うのほるこうの度はさくれれそ法うちきあう女のう

らさぬ。まんの。すう。袁き注へう。お柳ふ。を。えき。柳。ろ。うう。きぬ。そのすう
めれと。れ。まめこう。けきは。とう。を。こへいへくを。ろ。やえ。風
この表は。ふかれ。えぬり。まんのすう。もは。ちすうの袁なへ。柳のうう。を。ぬ。ぬの
あう。ぬのう。うさぬと。宝なれり。れう。誤なと。ゆるに。や。識考ふと。へ。これ。裝
朱のいまめう。れふ。さたすきたるふかれのと。みきて。えゆるを。今えなるうへのれ
ら。ぬ。ぬとにて。若き人ふ。とうなほ。ほしたまに。ろやうなると。れう。とう
うへいへくは。年れ。老たるを。若きうたふ。とう。えたきれり。他の人ふ。とうふるにを。
ゆうに

うへ人と十七人を。文のれうたふ。ぬ。ぬりたふ。れと。えれを。えれは。橋（徳子）（朱雀帝）
三位。とういく人。そ。にを。こちを。文。式部。うちにを。こ。ふれ

うへ人。ぬふえたると。用く。内裏の女房なり。とういく人は。ゆゆちえ。式部。
ふかれなり

みうと。さえん。こちう。帳。れ中に。二とこちなう。たそ。また。あさ日の光う
あいて。ぬを。ゆれまして。をつうけなるたまへなり
あさ日の。朝日れとくの。えなう。光うあいては。常を日に。ゆえを月にて。上へき
りてゆちにて。月日の光りあひたる。ぬに。れへ。れう。朝日とうを。ゆるは。をに
あさうう。ふれうを。れなれをなり。ぬふ。日たけてゆうの。ほるとあれは。ぬをの朝日れ
らぬうは。ちうれたり。ぬを。ゆきは。ガ。ハエイなり
うへは。れなほ。こくちまり。えは。まんの。れなぬの。れを。ちうそれ。ぬを。え
さ。柳。ふ。吹のれ。ゆう。へに。を。えひるあれなりを。れ。れを。柳のうへ。ろ

のれこうちきこうんも、なもめつゝしくんゐめうさ、まれり、あなたそ、
れと、まゝせうなれは、このれくふやをゝすへりとゐりて、ぬたり
れなほ、こくちのと、ほかに、又申、あなたい、まふ、ゝ、へて、れ、ゐり、宣をれ、なる人し、
けせうい、ゆゝそなる、えなう、やをゝ、すへりと、おにれり、　れをも、数か
にゝう
中はうさのめ、れと、えれたき、まうて、れすれそさゐゐう、えれみさゐかれて
まふ、こゐふをは、くしくなとは、あゝぬうたちの、ゆゝ、ゆゝうに、ゐ
のくしさ、ゐうちして、さふ、うたか、人をしはへくうとくしれまは
ひそしたる、えひをめのれりノをのこうちき、むえんのあをれろにさ、
らのうゝをぬれたり

えは、れと、えなるへし、ゆて、まふれたし、まうなうそくしくゐ、ゐいうたちをれへ
るれまいせふ、ゐたとは、ゐをそ、そひやうなゝぬさゐをれ、なるへし、さふうたか
ゐ、ゆの人をとさゐのうたふしいへくゐ、ゐて、この中いうさのさゐをほうてれへ
ゐり、ゆ、本、ゐい人れしいへくなるへし、れそれたゝ、
ゆのは、れ人のさうゆゝくれいれとなくいさしたるを、神ちのあそひ、ゐろう
うき、神たる人しれ、ゐ、へのゆ、ゝれとてきゐゝのうんたちめ、ゐ上人
に、さしれて、ゐほれていることゝ、ゆ、れちふ、宰お君なと、ちをしうゝ、ゆ
ふめうし、さふは、あしうをゆうさ、ゐ、ゆ、ゐ、れ、ゐ、あそひのさだめたるなり
神ちのあそひは、うゝ、神たる、神にのうゝきさゐなるへし、人しもの、しもはさし
れて、人係れり、ゐ、ゐ、の、れは、ゐをふ、ゆにる、ゆ、ゝの、れなり、さしれてはれをの、れ

とられつとはいはれぬ。うき世の中のうきを神にいのりしかどもしるしなかりしを。
られるはまことにいるにて。上人新。屋上人とともになり。されちふはれぬ。
そなたなるにかう。宰相殿は。如房なるとものとらるるに。侍の侍ふ。懐中
とられたるは。いまこそひとしれず。さぶらふ。式部のんふとうらて。
は。人のさうなくこそとうきかれあるこそ。さて。神にのうき。祈さぶらふ。
めれこそとなり。となり。さためたるなりはさたあるなりのこえなり
こと。数。数。一年にうる。　さため。数。数。にうる
こうまは。うまなぬこうき。祈うへにおうえんのこうほき。いつをうき。祈た
り。ううきぬさうう。源式部は。おくふ。又うえんの乃。あや。数。さて。作るめ
ま。たりうのなるぬをうろしとにやうるしあなうちのこと。ませうな

ゐにしをうき。とうあやまちに。ほの乃えたうんをはめをと。えうせ
ぬうへけまうきぬのたとうゐさうはいふへにこと。ふうは
たりさのなるぬをうきけふの如房とこと。織物を。おさうをうろしとなるさゐ
をえて。式部の品ふんなう。さんあなうちにこうは。織物はかとうすれた
とにこしなるぬもおふけてはとろう。祈さまうに。織物なるぬ。と
ろしとふはあなうちなるこれり。さてそうをうとうふへり。まうなる
ま。うこれぬすりにこのうまでうなる。あうう。所にう物をうりてだくほうえたゐ
りて。とうあやまちにほの乃をたうんをしほの乃えたうふそほの乃えたうんをは
めをと。うにこ上を新。屋上人なとと。えうで法ふへけまとれふ上。如房とのう
ふしをとうくえうれてこれく。うこれあうさゐ。んをちひなとをうをれをあとれふ

えあまて。上まき殿。殿上人。されえられてゝ。如房しもの。濃紫なるぬをゝ。ろろきと
にしたるとを。武殿のよりてゝ。へられり。されは。さぬのたゝう。ほうは。ゝ上人きこと
なるに。よれり。又たすふ。ろろしとに。やは。上まき殿。殿上人。されろ。さらしに。ゝへる。え
とゝ。ゝたり。えは。ゝにとけりる。ほ。さるゝして。えへ。大うたえたうえに。さて。ゝふ。
ゝそうのえたちゝ。殿上人。ふさしゝて。ゝほうゝ。ゝるえのえ。ゝて。ゝの人。されら
ゝしゝひたらゝ。文にええさしとも。ゝふ。ゝりものなるぬをゝろしとに。や。又え
らを。ゝ上けきなとあるを。えは。ら。あしえゝひゝひたるら。は。たのゝうゝゝう
ゝしたるをや
もちひはあるを。ゝ上きとゝをえゝ。ゝれだゝなと。ほうえゝ。ひさしゝ。されにあ
くほさはふゝへの女房は。ゝれ丁。されにしたものゝのたほに。たしゝうき。祢

ゝるえゝにて。なみゐたる。三位やきめて。内侍のすけたちと。あほたま
ゝのきり
もちひは。ゐ十日の鍋ゝり。二の宴にゝうゝ。ゝへうゝへの女房は。ゐに。えをたるとほ
しく。内裏の如房なゝ。ゝれ丁は。ゐなるも。次なるも。ゝれ帳なゝへし。ひのた
ほしに。たもたちたる。幸の四宴なゝ。記録書などふ。撤書御座などえを
るは。書。侍所のうたになゝ。三位は。三位なる女房ゝ。たれいおうこへをちえふされとゐる。なみゐた
えの人ゝは。わうゝとは。なけしゝ。されしを。東乃ひさしの。南のさうし
それちて。みにうに。たるに。上らうはゐたり
これは。中えの如言。よゝれり。長押のしをにゐたりとゝふをを。えちのつゐて。う
ゐたり

みすれひんうしをさ屏。ぞ〜すこしゐるに。大納言殿。こゆ殿へ
御所に。たいまゆをして。帝。うへは。ひ〜〜しをの御衣に。たうの御ゆりに
名たり。花夫乃もをしたるさ屏。いひはくさんうたな
ひ〜しをし。禁秘抄。清涼殿。條に。平敷。畳三帖。綾綱。南上中央。茵一枚。中。唐綾。端。錦。と
裏打。御飯。在御座南端。朝東。東西面。敷。
をたり
にのさに。ゆむきに。ふしをこゑみにて。こんたちめ。たゞ。うちのたほれとも。
妻戸。ちを。中戸。ちを。に系。大納言。ろれらうゆは。えん。ゆ〜さうに。
れあをひあり。殿上人は。このたれ乃。たいをにあたり。ゆらうにさろ〜
ふ。地下はさたまれて。うけまさのあをんこれをのあをんゆらう。と
をまさなとまうす人を

たゞ内大臣。道長公。頼光公。ちを。をれり。地下はさたまりとは。地下の人の。
ゆをへにをふさたまりてさろふをれ。ふうけまさ。四人の人をにて。中ゆにさ
ふふれり。花をゆ。ゆ。大敷は。ふ〜〜に。堂下にて。中をゆり。湖月抄の説に。
中ゆい。地下の役なと。をたまはなり。　中戸。妻戸。にらてくをへつ
うへに。に系。大納言。をうし。とう。拍子。に。無。び。れ。ことは。延喜。朝。に。た。宰
お。中ゆ。笙。さうのふを。上。笛。双調。さうをて。ゆ。あれたゆ。つぎに。むを
乃。ゆ。こを。殿。なとうたゆ
うへにを。地下に。ゆへなう。さうをて。をに。和名抄に。雙調曲
をうちふ。俗馬樂。ゆりなり。あれたゆと。席。ゆ。この殿。れ。ふれと。俗馬樂のうた
ひもをを。呂乃。奇れり。　延喜朝に。新。にらてくをへつ

ごく（曲）ものは、とうれは（破）、そうそうをあれふ（外）とのさ（座）にも、てうしなどをふく、ふのふ、そうしうちたうへて、とうめ〜ぶ、れせの海ふをつかまつる

ごくれものとは、ゆ多の音をゆをれふ、とうは、拾玖抄、壹越調のうちふ、鳥とれ上をたこれなるへ〜、ういぢのものにうきまさは、これなるめてをそしらぬとて、とうのまひをけ〜さそうまひ法ふ法、ふなとをたり、破、急ハに、へて一曲のうち、序、破、急あり、それをれふ、ふのふうとうめ〜るをのうちたうへたるは、伊勢、海にそあり、とうをれ小て居へ〜、伊勢、海、これも俗馬柴の律れ、ふなり、

ごく、ゆ若菜まにごくの物ととを居て、新や平にも、ごくつるにも、ゆそゆ可〜、新やにうてくそふ

右のたと、わこんれとたそ〜ろ〜なと、ゆ、そや〜法ふされ法ふ、ゆを〜〜にそれみ〜れあや、ゆちれと法〜そつをて、居る人の多さへ、ひえ伝可〜れれたり物、ふえ二、第にれまてとを、居えひえ伝可〜

右のたとは、きそそや〜法ふ、係れり、あ琴ひき法ふにそあるにされとおにわ琴れをさるは、たちたるにや、され法ふ、ふ、れ法ひそく、人をみなりうは〜〜され法ひ〜きそにそれみ〜れあやまちなとゆうしを居て、分をひえ伝可〜しとれり、居る人は、武、新なり、ひえは、ゾッとゆる、ゆかり、れたり物は、道長公ゆり、新、光なとへ、ゆ、ゆ、物なるへ〜、

をけりて、今ふ、すををへなり、　まや〜法ふ、新や平にゆて、ひそれとゆ〜きをそを、新やにゆる

金三郎本

跋

紫式部日記。此之其所著源語。其文似稍遜焉者無他。彼屬虛構。此則據實。亦足以相發。併以見紫氏之全矣。獨奈世之愛翫尋繹者。彼多此寡。以致舛訛重

累殆不可讀清水子慨焉鑽
研有年考覈良勤又諮詢師友
舍己從之作釋四卷然後裳弍之
面目無復隱蔽猶披雲而霧矣
其功亦偉矣哉
癸巳季冬離屋鈴木脹題

明治二十三年五月補刻
同　五月製本
定價金八十錢
發兌所　京橋區木材木町三丁目　朝陽館
同　柏原政次郎
同
弘賣書肆
吉川半七　京橋區南傳馬町
青山清吉　小石川區傳通院前
大倉孫兵衛　日本橋通二丁目
目黒支店　京橋區壱丁目
敬業社　神田區小川町
鶴巻支店　芝區神明前
齋藤鎌造　下谷區池之端
吉田久兵衛　淺草區廣小路

915.35

SH49

終